

岑仲勉氏の「白氏長慶集研究」について

花房英樹

あの暗い十年の間、我國と中國との學界は遠く隔てられてゐた。やがて終戦とともに新しい世界は開けて來たが、なほ事情は不通であつた。

その昭和二十一年のころ、神田先生の助言を仰ぎながら、私は白氏文集の文獻批判に著手し、翌年に至つて完了、續いてその文學に眞向つてゐた。それから三年を経て、戦争の爲に公表されなかつた幾多の業績を収めた、國立中央研究院の歴史語言研究所「集刊」が漸くに到着した。そしてそこに、はからずも岑仲勉氏の勞作を見出したのである。かつて私が採つた對象が似通ふ手續きで處理されてゐた。同志を得たことゝ、私の結果を驗算し得たことを喜ぶとともに、又心の痛むのを意識せずにはゐられなかつた。氏の論文に觸れてゐたとすれば、二年に近いあの段階に於いて、時間と努力とをかなり節約することができただらうと考へたからである。更には我國に存する資料を提供することによつて、岑氏の勞作をより充實し得たであらうとも考へたからである。かうしたことはこの場合のみではなかつた。しかもその後も、一再ならずして事例を聞く。事態は一向に改善されてゐないのである。私は屢々岑氏に直接話しかけたいと思つたが、そのよすががさへないまゝである。そこで、いつか岑氏の耳にも入ることがあつて、御意見を伺ふ機會もと願ひ、かつはわが學界で我々の結果との對比も要求せられてゐるまゝに、氏と見解を異にする事項を書きつけた舊稿の中から、思ひつくまゝに抜出してこ

の一文を綴つたのである。

一

五代を経て宋に現はれる唐代諸賢の文集は、その殆んどが原形から遙かに遠ざかつた姿を呈してゐる。白氏文集も例外ではない。それは、既に唐代に於いて多様な寫本が存することから始まり、五代の動亂の中で散逸し、北宋で原形を回復しようとする努力の爲に、却つて後人のさかしらが加へられ、更に南宋で上梓される際に傳本の吟味に闕けるところがあつた爲である。その故に、南宋本に據る今本から、原形を探ぐることは困難でもあり、危険なことでもあつた。多くの先達の努力にも拘らず、原本の形態は長らく不明であつた。従つて傳本の源流も徒に摸索されるのみで、種々の假説が提出されるにすぎなかつた。もとより今本の相互關係も明かにされず、それらへの評價もともすれば印象の域にとゞまる外はなかつた。

今、かうした課題に正面から取組み、さまざまな障害を克服して、ある解答を引出した業績が出た。岑仲勉氏の勞作がそれである。第九

本には、

論白氏長慶集源流並評東洋本白集

白氏長慶集偽文

白集醉吟先生墓誌銘存疑

と題する三篇が見え、第十二本には、

補白集源流事證數則

從文苑英華中書翰林制詔兩門所收白氏文論白集

文苑英華記校白氏詩文附按

從金澤圖錄白集影頁中所見

といふ四篇が載せられる。この七篇は一貫して、白氏文集の文獻批判であるが、主論文である第一篇は、先づ基礎研究として白氏文集の編定經過を究め、文集の體制を問ひ、次にそれが五代を経て宋代に如何にして傳はつたかを尋ね、宋代に於いて記録された傳本の異同を考へ、更に今本諸本を比較してその訛脱竄入を定め、那波本を中心としてそれらの優劣にまで及んでゐる。まこと充實した勞作である。

文集編定については、全く不明のままに放置されてゐた「後集」成立の時期を採上げたことは、最も注意されなくてはならない。氏はそれを會昌二年と推定してゐる。ほゞ首肯されていゝ結論であらう。傳本の源流については、唐末より宋初に至るまでの、各種の記録が蒐集されてゐる。これ以上に資料を提示することは不可能であらうと思はれるほど、博さは無類である。こゝに立つて、宋初に於ける一集本が、李從榮の鈔寫に出て、この鈔寫から今本の錯亂が發するとしたことは、從來の研究をつきつめたものとして耳を傾けるに足る意見であらう。

岑仲勉氏の「白氏長慶集研究」について

南宋集本についても重要な提言がある。陳振孫のいふ(直齋書錄解題)、蘇本と蜀本との差異は、詩文錯雜して配列し、ほゞ前集後集の體制をもつものと、先に詩を配し、後に文を列するものとの別であると定めたことである。汪立名が(白香山詩集)、その複雑さの故に放棄し、それ以後採り上げられもしなかつた問題を掘り起し、解決への歩を進めたことは尊重すべきであらう。更に各種の板本について精細な實態調査をなし、黎庶昌が(拙尊園叢稿卷六)、唐代卷子本より出ずるものと見た那波本を南宋本に發するものとし、盧文弨が(群書拾補三十七)、宋本に直接し諸本の上に立つと考へた白氏諷諫本を、明人の後改に係るものと斷じたのは、從來の誤解を正したものとして特筆されてよい。又、俞大綱氏が(集刊第七本)、唐音統籤に載せる詩二十餘首は續後集の一巻であらうと推定したのは對して、それらの作品は前集後集から逸落したものであり、續後集に収まるべきものでないと主張することにも贊意を表したい。さては今本の中に數多くの偽文が存すると指摘し、新舊唐書及び登科記等の諸書を涉獵し、作品の内に含まれる事實より實證しようとなつたことも考慮に値する。

二

かうした數々の發明はあるが、なほそこに急ぎ過ぎた結論があり、誤つた判斷もないではなく、幾多の問題が残されてゐる。

主論文の表題に「白氏長慶集」と掲げられてゐるやうに、岑氏は文集を長慶と名づくべきものと信じてゐる。もともとこの題名についての論議は古く、汪立名が長慶で以つて呼ぶことを非としたことから始

まり、ついで四庫提要はさうとのみは考へられぬと駁し、やがて黎庶昌が汪立名に荷擔し、島田翰も同調してゐた。それを岑氏は深く吟味もせず、「後集」「續後集」も、その言葉の中に「長慶」を含むものとして極めて單純に解決してゐる。文集編定の経過を注意して述べれば、白居易の命名は「白氏文集」に紛れはない。岑氏は汪立名以前に問題を溯らせたに過ぎないのである。「長慶集」に收められた作品量についても、氏の見解には賛成し難い。氏は、汪立名の所説を否定し、「後記」の「二年」といふ文字を「四年」に改め、今本後集に長慶三年、四年の作品が收められるのは、前集のそれが混入したものと定めてゐる。しかしその根據は、氏が原形を失ふことの甚しいものとして過重に非難する今本の體制である。事實にも叶ひ、宋本以下の諸本に異文も無く、それで十分論理の通じる文章の文字を變へようと試みるのは、寧ろ氏に似着かはしくないことである。後集の體制についても早まつた判斷がある。氏は後集二十卷は、先に韻文を配し、後に散文を列するものと考へてゐるが、この結論を導き出したのは前集五十卷の體制である。しかし前集と後集とは全く異つた過程で編纂されてゐるので、單なる類推は許されない。その跋に「會昌四年夏五月二日、寫得勘了、惠夢」といふ文字の見える古鈔金澤文庫本の卷五十九が、散文であることが示すやうに、後集は前十卷と後十卷とに分れ、それぞれに先詩後文の配列をとつたことにほゞ誤りはない。文集原本の體制についての當を失する氏の見解は、今本の分析に闕けるところがあり、編定経過の追究に詳密でなかつた爲である(拙稿本誌、第一號)。

三

傳本の源流についても疑義がある。氏は唐末から宋初に至る間の文獻を涉獵し、それらの記録が悉く「七十卷」に限られるから、當時存するのは七十卷に過ぎぬと判斷してゐる。しかし、注意しなければならぬ點がある。といふのはこれらの記録は悉く東林寺本及び香山寺本に關するものであり、他に及ばないといふことである。従つて、記録に七十卷と見えることは、當時の特殊な集本がそれであることを證しはしても、そのみしか存在しなかつたといふ理由にはならない。既に「白氏集後記」(文集卷七十一)に見えるやうに、居易の晩年に「日本新羅諸國、及兩京人家傳寫者」があつたのである。我國に於いては、その原鈔が居易生存中に係るものもあり。更には日本見在書目にも三種が記されてゐる。中國に於いてはこれ以上であつたとも信ぜられる。王重民氏の巴黎敦煌殘卷敘錄には零本が見え、又、才調集や舊唐書に引く詩文も、北宋初年に現はれるものと異なる所が多いからである。それらの中には、七十卷の外に在る作品を載せた集本があつたに相違ない。文苑英華を取つて見ただけでも理解されるのである。詩に一例をとれば、「寄荊山南淮南二相公」(文集卷五十八)が見えるが、それは那波本にも卷七十一に、「予與山南王僕射、淮南李僕射事歷五朝、踰三紀、海內年輩今唯三人、榮路雖殊、交情不替、聊題長句、寄舉之公垂二相公」と題して收められてゐる。そこに含まれる事實は會昌二年以後のものであるから、原本には卷七十一以後に列せられてゐた筈である。文にもかうした例はある。「太湖石記」(文集卷八十九)を採らう。この作品には、

「會昌三年五月癸丑」の日附がある。岑氏は「癸丑」を「丁丑」として疑を存してゐるが、文粹(卷七)に據る全唐文(卷六百)しか見ず、英華に及ばなかつた爲である。この作品も亦卷七十一以後に列せらるべきものである。英華編纂當時にも、原本の續後集は何らかの形で傳はつてゐたのである。宋初に於いて、七十卷を越える作品群を載せる集本があつたことは認められてゐてあらう。(拙稿東方學報第十九冊)

これが見極められなかつた爲に、岑氏は第二の誤りを犯さねばならなかつた。南宋に現はれる卷七十一に關する見解がそれである。氏は「五代及び北宋初に見える七十卷」以外の作品は、「後人が遺佚を搜集して七十卷の後に附したものである」とし、その時期は、

歷後周迄宋仁宗、諸家所記、卷祇七十、其第七十一卷、應是南宋以前拾遺補附。

といふ文字にも窺えるやうに、北宋中期からその末期までと考へざるを得なかつた。だが、唐末から宋初に至るまでに採り上げられなかつたものが、どうしてそれ以後に見出されたのであらうか。殊に宋初三朝に於いては、前代の動亂に遺失した文獻の蒐集が異常なまでに努力されたのである。この宋初に存しなかつたものでそれ以後に取出されたといふ例は極めて乏しい。これはどう理解したらいいであらうか。

卷七十一が北宋後期に附されたとするのは不都合である。氏の立場でもさうでない方が論理が通じるのである。といふのは、氏は陸遊の入蜀記や陳舜俞の廬山記に據つて、眞宗の景德年間に内府本が複寫されて廬山へ送られ、それから出る本によつて南宋諸刻が成立したと述べるが、その南宋本に卷七十一が存するのであるから、既に内府本にそ

れが含まれるとすべきである。氏はこれを如何に説明するであらうか。北宋初年の集本にこの卷七十一が附されてゐたことは認められなければならない。

それによつてこそ、氏が不注意にも考察を怠つた今本の成立も理解されるのである。今本七十一卷本は、七十卷に一卷を加へたものとしては到底解釋し得ないのである。前集五十卷の一部が闕脱した爲、後集の卷五十一以後から埋められ、更にこの後集の空隙を充たさうとして、續後集卷七十一から若干の作品が後集に移された、その結果として成立してゐるからである。後集が完成した後に制作された作品は、卷七十一に收めらるべきものであるが、それらが後集卷七十以前に載せられてゐることが、續後集の、後集への繰り上げを物語つてゐる。

その最も明瞭な一例は、後集の成立したことを告げる「送後集往廬山東林寺、兼寄雲臯上人」の詩が、卷六十九に列せられてゐることである。従つて今本七十一卷本は、七十五卷中の五卷が失はれ、失はれた卷の一部が採し當てられて、始めの七十卷に加へられたものではなく、もともと七十卷を越える集本があつて、その越える部分の一部が七十卷の中に移されたものである。その故に今本は少くとも北宋初期に源を仰ぐものと思はれるのである。批判の基礎たる今本の形態を氏が説明し得なかつたのも、根本的には宋初の集本が七十卷であるとし、次いで卷七十一がその末期に加へられたと見たところに理由があつた。それはあまりにも間接的な他書の記録に頼りすぎ、内部的な考察を缺いたからである。

四

諸本の比較研究も吟味されなくてはならない。いま氏が最も重點を置いてゐる那波本と馬本についての比較をとらう。結論としては那波本よりも馬本が優位に立つといふ主張である。その根據は、

因東人多味我國字義，烏焉滿紙，未得見其獨善。

といふ指摘から始まる。那波本の文字が他の今本より必ずしも善いとはいへぬといふことには異議がある。例として氏が全唐文との對比に用ひてゐる校勘表を利用しよう。これによれば、盧文昭所見の影宋鈔本を基準として、那波本と馬本とが比較されてゐるからである。影宋鈔本と馬本との差異は二十五條ある。しかし影宋鈔本と那波本とのそれは、十四條を減じて十一條に止まる。これはこの場合に於ける那波本の文字が、馬本のそれよりも遙かに宋本に合することを示してゐる。しかも、馬本二十五條中には、文字を脱すること七條にも及び、衍字も一條存する。那波本は脱字二條、衍字は全く無い。先の烏焉の誤りは許され得ることもあるが、この衍脱は救ひ難い。人を誤ることが多いからである。馬本は那波本よりもかなりに亂れてゐることは疑へない。これらの傾向は、たゞこの「興元九書」一文に限られることではない。稀にその位置を換へることもないではないが、ほとんども宋本に對する、それぞれの全體の關係として認められる。しかも、屢々現存宋本を凌ぐこともある。この同じ文に於いて、胡適氏は、所見の宋本の影照と那波本とを詳細に比較してゐるが、差異は僅か九條しか存しない。その九條も、宋本は「脱三字、誤四字、倒一處、不如日本本（那波本）」

之佳」^{（胡適文存三集卷四）}と結論してゐる。この判斷は、そのまゝ信じ得るものとは考へないが、宋本よりも優れてゐるところのあるのを否定することもできない。とすれば、那波本は、たとへ宋本から多少ずれてゐるところがあるとしても、その距離は、馬本がさうであるよりも甚だしく小さいものであると承認されなくてはならない。訛誤衍脱は那波本より馬本に多く、「烏焉滿紙」といふ批評は、むしろ馬本に與へた方がより適しいとも言へよう。

次いで擧げるのは、

有比東本（那波本）多出者，如卷六六多得乙在田妻餉不至判一首，

卷七一多醉吟慕誌一首。

と述べるやうに、馬本が作品をより多く載せるといふことである。たしかに馬本にはこれ以外にも「曲行獨行招張十八」^{（卷十）}の詩を始めとして「佛光和尙眞讚」^{（卷七）}など、那波本に見えぬ詩文がある。しかし同時にまた、馬本に脱落して那波本に載る作品も少くない。その中には盧文昭所見の影宋鈔本に存しながら、馬本に佚したものもある。「失婢」^{（卷五）}などがそれである。又、影宋鈔本と別系である北宋刊絳雲樓本に「送劉郎中赴任蘇州」^{（卷五）}等がそれである。更に、他に載せられずして金澤文庫本には收められてゐた「濟源上柱舒員外兩篇因酬六韻」^{（卷五）}も見える。現存の資料には絶えて見るを得ない作品もないではない。「同崔十八宿龍門、兼寄令狐尙書馮常侍」^{（卷五）}などはこの那波本によつてのみ傳はつてゐる作品である。これらを總計すれば、收載量は馬本を越すのである。もとよりその中には偽文も含まれてゐる。

「李德裕相公貶崖州三首」(卷二)を挙げ得る。だがこれも陳振孫によれば宋本に存してゐたのであり、誤收は宋本に基くのである。そしてこれらの誤收を減してもなほ馬本に比しては餘りがある。従つて馬本がより多く收載してゐるといふ結論は導かれぬ。岑氏は、馬本には那波本に見えぬ作品があると言ひ得ても、馬本の方がより多く收載するとは言ひ得ないのである。氏のこの根據は取るに足らない。

たゞ最後の一項は十分に首肯し得る。それは那波本が自注を削去してゐることである。

削注之弊、殆東本特尸之、亦即最大最要之缺點也。

と詰責してゐる。まこと自注は、それなくしては理解の困難である場合もあり、又、それまでに例の稀な形式を積極的にとり入れた點に於いて、居易の文學そのものにまで連る一事であり、文學の研究に於いても揺がせにすることのできぬものである。その故に削注のことは非難されて當然である。だが一方では、馬本の自注にも問題があることを見逃してはならない。その一は脱落である。汪本に見え、影宋鈔本に載せられるものを、馬本が脱してゐることがある。「答聞上人來問因何風疾」(卷三)の詩の場合を、一例とすれば足りるであらう。その二は文字の訛脱である。「法曲」(卷三)の「樂府有堂堂之音、」といふ注文に於いて、鈴木先生が指摘されたやうに(案問)神田先生所藏古鈔本を首とする舊本には、「音」が曲となり、「再興」の上に、「欲」字がある。更に重要なことには、「唐祚」の上に「再言堂々者」といふ一句がある。これがなければ、居易が注した意圖は汲み難いのである。その三は、群書拾補に、「注後人所加」と指摘する場合である。原注と同じ形式

岑仲勉氏の「白氏長慶集研究」について

ではあるが、宋本になくしてこの本に見えるものである。傳來の途上に於いて加はり、又、馬元調が意を以つて新に増したものもある。いづれにしてもこれらは、原注と峻別されなくてはならない。屢々その故に誤られるからである。馬元調が増した一例をとらう。「琵琶行」(卷十)の「楓葉荻花秋瑟瑟」の句下に、「半紅半白之貌」とあるが、この注は正文の「瑟瑟」を解したものである。しかし「瑟瑟」はもと那波本のやうに「索索」に作られてゐたのに相違ない。楊大鶴所見の宋本(詩鈔)もこれに同じく、文苑英華(卷三十四)も亦同じことが一證である。ところで、この注は「瑟瑟」には適ふが、「索索」には附し得ないのである。従つて「索索」が「瑟瑟」に改められた後に附されたものである。この注によつて「瑟瑟」を解すれば、「索索」とは甚しく異なり、引いてはこの一句の意味をあらぬ方向へ導くこととなる。注が無ければまだしも、あることが却つて人を惑はすに至る。馬本の注は手放して信じ得ないのである。かうしたことを考慮した上で始めて岑氏の見解も認められるであらう。といふよりも恐らくは氏が考へてゐるよりも以上に重視されなくてはならないであらう。だが、それだからいつて馬本が那波本より優位に立つとは俄に結論し得ない。氏が掲げる先の二條件に於いては、寧ろ那波本が優れてゐるからである。

しかも那波本には、中國に傳來して現存する、凡ゆる資料を越えて一つの長所がある。それは、前集後集に區分され、後集が更に前後に分別され、それぞれに詩文を類聚し、續後集がこれに續くといふ、文集の原形を傳へてゐることである。もとより完全ではなく、時に錯簡もあれば或は改竄もある。しかし他本では殆んど想像さへも容易では

ない原本の體制が、そこに彷彿として見得るのである。かつて馬元調が、「此序宜與元相序同列秩首」(卷二)と、「後序」の位置について思ひ誤つたのも、汪立名が「會昌末年諸作、又已收後集、蓋卷次刪并、其舊自不可復尋」と、續後集の内容について苦んだのも、四庫提要の「今所行本已迥非當日之舊矣」といふ歎きも、馬本を中心とするその前後の今本しか見ず、那波本に及ばなかつたからである。その故にこそ、黎庶昌が那波本に接して「確然出自當時卷子本、可謂廬山面目也」と驚喜し、「正編固自完全無闕、實可寶貴」とも讃歎したのである。黎庶昌の言には過ぎたものがあることは確かであるが、それほどに從來の問題を解決する鍵がこの本にあるのである。岑氏が今、原本の大體を察知し、そこより幾多の發明をなしたのも、この本に據ることが多いのである。更に言へば、先に記したやうに、後集の體制を見誤り、傳本の源流を見定めることに不十分であつたのも、實はこの本を重視せず、吟味が足りなかつたことに由來するのである。文集の批判について第一の資料であることは認められなければならない。それが認められるとすれば、たゞ文獻研究に於いて重要であるといふにとゞまらず、居易の文學研究に於いてもまた忽せにすることができなのは當然である。作品の配列や編纂の仕方が、作者の意圖したその形態に最も近いからである。いかに配列し、いかに編纂するかといふ意識を支へてゐるものも實は文學なのである。その故に配列や編纂を通して、文學を理解することも一つの道である。居易の文學は、年齢とともに移り、環境とともに變り、時代とともに動いて行くのであるが、それを理解する手掛りとして、文集編定の經過を如實に示す那波

本の形態は重要な意味をもつのである。文集とその文學とを對象とする者にとつては、創注本であるといふ缺點を覆ひ盡すほどの價值があると信ぜられる。篇章の文字と收載量とについて、馬本よりも優位に立つ那波本は、この點について遠く馬本の上に出るのである。岑氏の、那波本に對する苛酷な批評は、創注のことが根本であり、他は附加的なものであつた。そして氏はその創注を我が國人の所爲として嚴しく責め立てゝゐる。那波道園の「白氏文集後序」の一部を引いてかうも言つてゐる。

由序言、那波所見尙有注、其信爲後人不知輕重、省工而削去矣。しかしこれは全く見當違ひである。「後序」の文字は、廬山・聖善・南禪の三寺に在つた文集、又、洛詩・洛中集・元白及び劉白の唱和集についての、居易自らの解説が悉く見え、一篇として脱落してゐないから、居易の原形のまゝの集本であるといふ見解を示すのみで、詩文の自注に一言も觸れてはゐない。しかも、もともと那波本の據つた本に、既に注は削られてゐたのである。その本は「朝鮮本白氏文集」である。我が國に於いても、近藤守重の「那波道園力活版スル所」の集本の、「原書ハ金澤本ナリ」(金澤文)といふ説が行はれ、現に金子彦二郎氏まで續いており(平安時代文學、と白氏文集)、創注も本邦でなされたものと見られてゐる。しかし小尾郊一氏が示唆されたやうに(東方學報第十、五冊第二分)、那波本は朝鮮本を翻刻したものであることに紛れはなく、創注は我が國に於いて輕々しくなされたものではない。しかも、事は朝鮮に於いて始められたかも知れない。溯れば、あの敦煌本が創注でもあるからである。岑氏の削注に關する説はこの點についても全く誤つてゐる。氏

がこのことを承知してゐたとすれば、或は削注本に對する意見も多少變つてゐたかも知れない。先の文字についての「因東人多昧我國字義、烏焉滿紙。」といふ見解と思ひ合はせて、那波本批評には或る偏見が潜んでゐるやうにも感ぜられるからである。

もとより方法にも不備がある。それは系譜的研究が不完全であることである。

馬刻亦脱胎於一種宋本。

と述べる氏の言葉は、かなり幅があるので眞意はさだかでないが、假りに馬本が直接宋本より出るものと解すれば、事實より遠いものである。宋本と馬本との間には、少くとも二本が介在する。その一は「明錫山華堅蘭雪堂活字本白氏文集」であり、二は「嘉靖十七年刊伍忠光校本白氏文集（姑蘇錢應龍梓本）」である（拙稿白氏文集の版本）。既に甚しい訛脱のあつた蘭雪堂本に、伍忠光が校正を加へたのであるが、なほそこには多くの遺漏が存してゐた。かうした本に據つて馬元調が更に校正を加へたのが馬本である。當時種々の努力がなされたのであるが、先行の本が錯亂したものであつた爲に、訛脱の多くが自然遺傳されることゝなつたのである。又、先行の本の題名の「白氏文集」を改めて、「白氏長慶集」としたことが集中的に示すやうに、校正が當を得ないこともあり、先行の本になくしてこの本に始まる、「半紅半白之貌」といふ注によつても、その一斑が窺えるやうに、故意に新を増したことも少くなかつた。その故にこそ、汪立名をして「刪落字句、顛倒前後、舛譌未易枚數」と評せしめ、盧文弨が群書拾補であれだけの校正を採り上げなければならなかつたのである。馬本は宋本から遠く隔つてゐる。那波

本にも宋本との間に二本がある。その第一は、「成化二十一年刊」と稱せられる「朝鮮銅活字本白氏文集」である。しかし先に觸れた朝鮮本はこの本の忠實な翻刻であり、那波本は朝鮮本に全く一致するほどの翻刻である（上同）。那波本はほゞ宋本に直接すると認めても差支へない。刊行年月こそ馬本のそれよりも遙かに降つてゐるが、實質に於いては、馬本よりも宋本に近接するのである。これらの宋本はもとより南宋本である。だが、この南宋本は相互に差異を示すものであるから、南宋に於いて一本が分れたものではなく、それぞれの祖を北宋に仰ぐものと思はれる。この見解を支持するのは、北宋刊絳雲樓本と瞿鏞所藏南宋初年刊本との差である。絳雲樓本は前集後集に區分しそれぞれに詩文を類別するが、瞿本は前後の區分を廢し、全巻を通じて先詩後文の配列をする。しかも、前者についての汪立名や俞大綱氏の記録と、後者についての瞿鏞や胡適氏のそれとを對比すれば、收載作品量に異同があり、篇章の文字にも異なるものがあるから、絳雲樓本が改編されて瞿本になつたのではなく、瞿本はそれと異つた本から出たものに相違ない。とすれば、瞿本の據る本は北宋末にあつたことゝなる。恐らくは絳雲樓本と同種のものが傳寫され、北宋末から南宋初に改編されて瞿本となつたのであらう。こゝに發する改編本が、その後の屢々なる刊刻を経て、その末に於いて馬本が成立したのである。従つて那波本と馬本の始祖となつた北宋本より見れば、馬本の方に遠い距離がある。この系譜の上からすれば、馬元調の校正を以つてしても救ひ難いものが多く残り、北宋本に對しては那波本よりも下位にあると結論せざるを得ない。直系にあり、しかも中間存在の少い那波本を棄て、傍

系であつて介在者の多い馬本を採る岑氏の誤認は、この系譜的研究を等閑にしたところに根源がある。

馬本優位説に關して、氏は群書拾補の校正をその本に加へればよいと提言するが、それについても留意しなければならぬものがある。先づ、校正の據り所である影宋鈔本が、常に信すべきものとはいへないといふことである。一つにはその原本が既に改編本であり、二つには宋本そのものではなく影鈔本であるからである。再び「琵琶行」に例をとれば、「水泉冷澀絃疑絕」といふ句については、段玉裁が觸れてゐるやうに（經韻樓集卷八十）、「水」は「氷」であるべく、胡適氏が考へたやうに「疑」は「凝」の訛字であらう。英華は「氷」に作り、「凝」に作つてゐる。那波本も亦英華に同じい。影宋鈔本は那波本に比しても善いと言へぬ場合もないではない。次に、群書拾補は必ずしも影宋鈔本と馬本との異を盡してはゐないといふことである。初めに擧げた「琵琶行」の句で、校正は「素索」であるから、馬本の注は影宋鈔本には存すべくもない。しかし拾補はこれについて何ら言及してゐないのである。かうしたことはかなり廣い範圍に互つてゐると推測される。その故に岑氏が屢々いふやうに、校正に見えないから宋本は馬本と同じい、とすることは危険なのである。馬本に校正を加へても傍系的南宋本すら十分に復現し得ない。岑氏の説に従つても満足すべき結果には至らないのである。

五

今本の批評にも吟味の不足がある。その二三についてのみ指摘して

おかう。卷五十二の「和微之詩二十三首」の序の、

微之又以近作四十三首寄來、命僕繼和、其間於絮四百字、車斜二十篇者流、皆韻劇辭、……四十二章、塵掃並畢、不知大敵以爲如何、

といふ文について、

前云四十三首、後云四十二章、大敵當前、居易未必示弱、則疑任一數目有誤。且今存二十三首、……非白氏自行刪汰、既傳本有闕矣。

と述べてゐる。先に四十三首、後に四十二首とあるが、どちらかに誤りがあると見、更に今本には二十三首しか存しないから、居易が棄てたか今本が落したかどちらかであらうと見てゐる。しかし二條とも氏の見解は誤つてゐる。第一については、この時の和篇は四十二首であり、残りの一首は、「因繼集重序」（卷六）で「和晨興一章、錄在別紙」と記されるやうに、程經て元稹に贈られたのである。この序が綴られた當時としては數字に誤りはない。第二については、元稹が寄せた作品の中に、「車斜二十篇」があると記されるが、それは車と斜との韻を用ひた二十首の連篇を指すのである。文集を検すると、この條件を満たす作品は、卷五十六に「和春深二十首」として載せられてゐる。

これは劉禹錫の「同樂天和微之深春好二十首」（同用家花車斜四韻）（卷三）といふ文、字からすれば、元稹に對する和篇に相違ない。卷第が隔つてゐるのは、先の二十三首が「格詩」であり、この二十首が「律詩」だからである。位置が離れてゐる爲に氏は思ひ至らなかつたのである。居易も棄てず、今本も脱してはゐない。

もとより今本に脱落した作品も多い。その調査の一方法として先づ、元稹と劉禹錫の和篇から居易の原篇を求めてゐる。しかし基礎となつてゐる和篇の採り方に不備がある。劉禹錫に一例をとれば、「赴蘇州酬別樂天」(全唐詩七)等が見逃されてゐる。次に和篇と原篇との照合についても十分でない。劉禹錫の「和眞娘墓」について、原篇は採し得ないとして一應今本の脱落と見なしてゐるが、文集には卷十二に「眞娘墓」と題する一篇はある。第二に、那波本の収裁量を計上し、居易の自記たる「三千八百四十首」と比較し、その差をほゞ脱落と定めてゐるが、今本収裁量の基礎計算に誤りがある。その一つは、卷二十三の「八漸偈」では八首としてゐながら、卷七十の「六讚偈」では一首として一括してゐることである。この二類は同性質のものであり、いづれかに統一すべきである。精密にも見える調査であるが、なほその基礎に於いて不完全である。

これに關して偽文の問題がある。偽文は後人の竄入であるから、これを除けば今本に於ける作品量は更に減ずるといふのである。だが偽文の判定に於いて俄には氏に賛成し難いものがある。例を「翰林制詔」(卷三十八)にとらう。氏は、作品に含まれる事實が居易の翰林在任期間外に屬するといふ理由から、四十八首を偽文と定めてゐる。しかし居易には、中書翰林で「書詔批答」の詞を選びとつて「程式」としたといふ事實があり(元氏長慶集卷二十二注)、これを編纂したのは長慶初年であることは疑ふべくもない。従つて元和初年に翰林を出た後の文も在り得ることとなる。この一類の偽文説は武斷に失する嫌ひがある。又、「醉吟先生墓誌名」(周本卷七十一)についても論じられなくてはならぬ點がある。

氏の力説する根據は、

按前人稱此書爲白氏著書、資暇集最早、似是唐末撰述。

と主張する「白氏六帖」がそこに録されてゐるといふ點である。しかし居易と殆んど時代を同じくする人々がそれを見てゐたと信すべき記録がある。第一は新唐書藝文志に盛均十三家帖が著録され、「以白氏之書未備而廣之」とも記述されてゐる。盛均は、全唐文や文粹にもその作品が收められており、會昌年間に名をなした人である。第二は、牛羊日曆の太和九年七月一日の條に、「傳業乃白居易六帖、以爲不語先生」といふ文字が見えるが、この書の撰者については、新唐書藝文志は劉軻とし、通鑑考異(卷二)も亦同じい。登科記によれば元和十三年の進士であり、文集によれば(卷三十)居易とも交渉があつた。これらは白氏六帖が中唐に行はれたことを示す。もとより今に傳はる本は後人の手が入つてゐるが、居易に出ずるものに疑ひない(拙稿漢文學紀要第三冊)。岑氏の力點を置く根據は成立しない。偽文についての論證は主として歴史的事實との相違、傍證的記録の存しないことによるが、これらについてにはなほ慎重であるべきであらう。

原本復現への今本批判は、基礎的工作に缺けるところがある。調査が行届かず、資料が不足なのである。しかもそれらが十分に吟味されず形式的にしか處理されなかつた。そこに急ぎ過ぎた結論が引き出されたのである。もし、かうした結論でもつて今本が整理されたとすれば、却つて原形からますます遠ざかつてしまふだけであらう。

六

なほこの他にも検討されなくてはならない數多くの事項があり、更には不問に付され、未解決のまゝに放置されてゐる課題も少くはない。これらは氏の文獻批判の態度に原因がある。該博な知識と微細な調査とに頼りすぎたのである。該博な知識は、外部的な記録を過大視させ、遂に内部的な分析を等閑にする結果を導いた。微細な調査は、形式的な事項にかかづらはせ、遂に本質的な意味を取逃す結果を導いた。氏は、氏の方法を押進めて或る程度完成してはゐるものゝ、もともとそこには限界があつたのである。しかし、この限界内に於ける仕事は確かに充實したものである。最も精彩を放つてゐるのは、作品の中に含まれる事實の追究によつて、その制作時期を推定する場合であらう。豊富な資料でもつて事實が的確に考證されてゐる。又、書誌學的な調査の徹底さにも追隨を許さぬものがある。記載形式が微細な點に至る

まで採上げられ、諸本の差異が明かにされてゐる。かうしたところに於いて、その始めに述べたやうに、從來殘されてゐた問題に一應の解答を與へ、又、長く傳へられてゐた誤謬を解きほぐし、妥當な見解をも提出し得たのである。殊にそれが、戰時中の逼迫した情勢の下で、しかも資料に乏しい昆明の地で、果敢にそして忍耐づよくなされたのである。その意欲と努力とは十分に尊敬されなくてはならない。もし氏が、平時の、恵まれた環境で従事したとすれば、かなりな缺陷も救はれたであらう。主論文の主題の一である傳本の源流についての、あの系譜的考察の不備も或る程度は補はれ得たであらう。少くとも、他の一つの主題である那波本批判についての、偏つた見方は大幅に避けられたと信ずる。戰爭が研究を二重にも歪曲してゐたことを、こゝでも深く悲しまざるを得ないのである。